

国際室 だより

No. 55

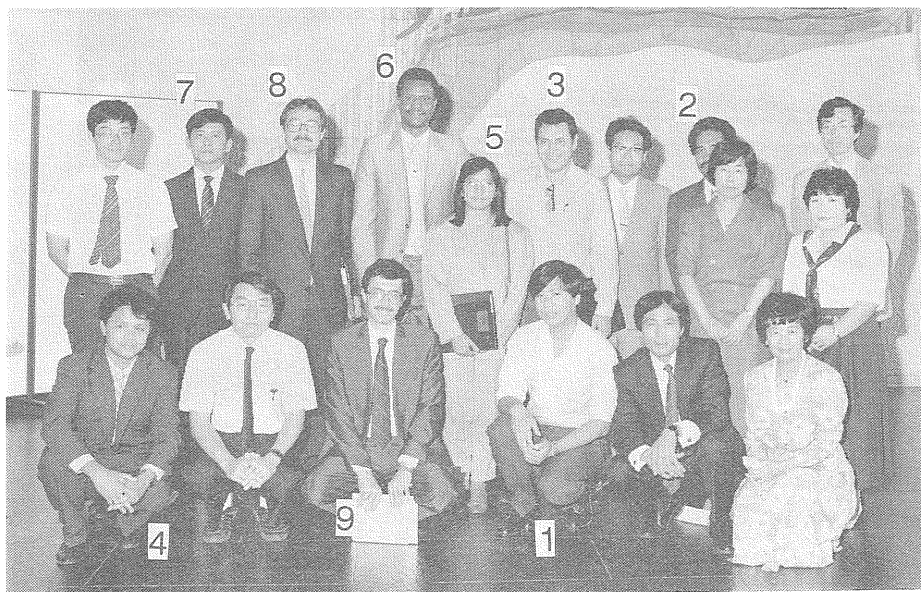
第24回沿海鉱物資源探査集団研修コースの紹介

昭和42年度に開設された本研修コースは本年度で24年目を迎え、これまでの研修終了者数は34カ国、244人になります。以前は年に十数人来ていたこともあったようですが、最近では毎年約10人の参加者になっています。本年度も当初は10人を予定していましたが、直前になって交通事故で参加できなくなった人がでたため、9人になってしまいました。

さて本年度は、フィジー、インドネシア、ペルー、フィリピン、サウジアラビア、タイ、トルコの7カ国から9人の参加者を迎え、6月4日から技術研修を開始しました。また、調査所における研修担当者は木下から、上嶋及び村上に変わりました。今年度のカリキュラムは、1) 初めに筑波大の佐藤 正先生、放送大の奈須幸紀先生をはじめとする海洋地質学界の權威の先生方に概論をお願いし、2) 海洋地質調査技術の講義および実習を地質調査所の現役の研究者に、3) 石油探査特別コースを石油調査の最先端で活躍されている民間会社の先生

方に講義をお願いし、4) その他、遠隔探知調査など海洋地質に関連があり応用可能な分野も講義に取り入れられました。そして、約4カ月の講義の合間をぬって数回にわたり、約一週間ずつの海洋調査実習や研修旅行をこなし、10月から約2カ月の個別研修に入っています。今年の参加者を個別研修のテーマ及びその担当者を含め紹介します。以下の番号は写真の番号に一致;

1. H. Loon Wong: フィジー, Mineral Resources Department (動力資源省鉱物資源局)
研修テーマ: 噴火湾のユニブームデータの解析 (海洋地質部, 村上文敏)
2. Lukman Arifin: インドネシア, Marine Geological Institute (海洋地質研究所)
研修テーマ: 駿河湾のユニブームデータの解析 (海洋地質部, 村上文敏)
3. F. D. Rabines Mantilla: ペルー, PETROLEOS DEL PERU S. A. (ペルー石油公社)
研修テーマ: 石油地質のためのリモートセンシング技術 (地球科学総合研究所(株), 佐野正春 氏)
4. Al E. G. Berador: フィリピン, Mines and Geo-Science Service, Region VII (天然資源省鉱山地球科学局)
研修テーマ: ボホール海の精密反射法音波探査 (マルチ) データの解析 (海洋地質部, 奥田義久)
5. Vilma A. Vecino: フィリピン, Mines and Geo-Science Service, Region I (天然資源省鉱山地球科学局)
研修テーマ: ルソン島北西部海域の精密反射法音波探査 (マルチ) データの解析 (海洋地質部, 奥田義久)
6. Khalid Kadi: サウジアラビア, Directorate General of Mineral Resources, Ministry of Petroleum and Re



1990年度沿海鉱物資源探査集団研修コース研修生と国際室職員一同

sources (石油鉱物資源省鉱物資源局)

研修テーマ：紋別沖の表層堆積物の重鉱物分析 (国際室, 遠藤祐二)

7. Suvit Serittrakul: タイ, Department of Mineral Resources, Ministry of Industry (工業省鉱物資源局)

研修テーマ：駿河湾のサイドスキャンソナーデータのマッピングと解析 (海洋地質部, 上嶋正人)

8. Taifun Bilgic: トルコ, General Directorate of Mineral Research and Exploration (トルコ鉱物資源総局)

研修テーマ：久慈沖のユニブームデータの解析 (海洋地質部, 齊藤文紀)

9. Cetin H. Mumcuogle: トルコ, Turkish Petroleum Corporation (TPAO) (トルコ石油公社)

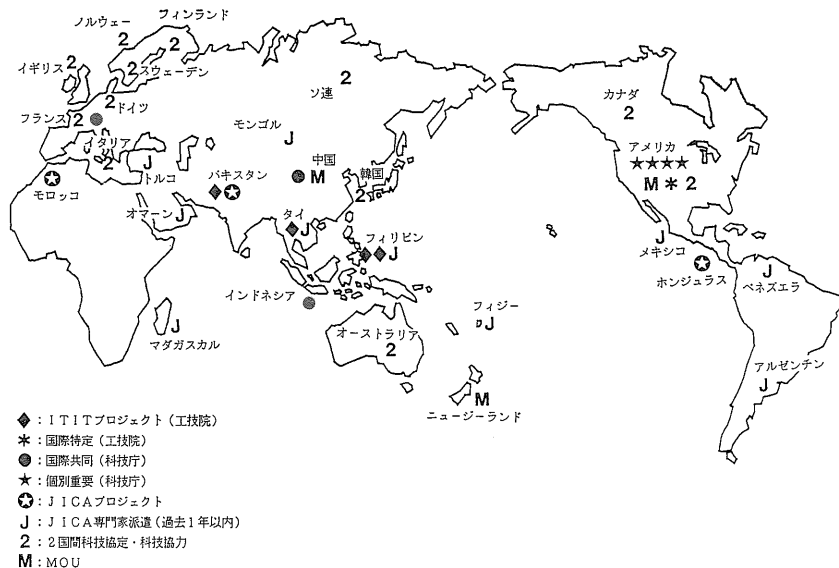
研修テーマ：トルコ南東部の沿岸海域における石油地質研究 (石油資源開発(株), 喜多保 氏)

日本の感想

A：日本で一番興味深かったのは地震の時に日本人が誰も関心がないかのように平然としていたことです。このことで大変驚いたと同時に日本人が地震の多い中で暮らしていることに気づきました。トルコでは地震は危険なものですから慣れてしまうことに気を付けたいと思います。(T. Bilgic)

B：前に日本に来たときは人々が単に似ているだけでなく行動様式も同じなので、彼らを識別できませんでした。日本は世界でもユニークな国の一つで、そのユニークさは人々、文化、政治に起因して経済的発展の一つの原動力になっています。政治もユニークで西洋式のようにいながら日本に良くマッチしています。日本は他の国の様には、政治形態、少数民族、労働問題などの困難に直面していません。このことが日本を大きく経済発展に向かわせているのだと思います。(C. H. Mumcuogle) (上嶋, 村上)

地質調査所における国際研究協力・技術協力の現状 (1990年11月現在)



ITIT: コリジョン帯の地質・鉱物資源の研究 (パキスタン地質調査所, 含油堆積盆地の標準層序に関する研究 (フィリピン鉱山地球科学局), 風化殻中のレアメタル資源の評価に関する研究 (タイ鉱物資源局), 緊急性希少鉱物資源の探査技術開発に関する研究 (フィリピン鉱山地球科学局・米国地質調査所), 国際特定: 大気中へのメタンの放出メカニズムに関する研究 (米国地質調査所), 国際共同: 砂漠化機構の解明に関する国際共同研究 (中国国家科学技術委員会), アセアン諸国とのリモートセンシング技術の高度化とその応用に関する共同研究 (インドネシア国立地質工学研究開発センター), 南太平洋における海洋プレート形成域 (リフト系) の解明に関する研究 (フランス, IFRE-

MER), 個別重要国際共同研究: 活動的地熱系の地球化学及び水理学的特徴と熱水性金鉱化作用 (米国地質調査所), 巨大活断層から発生する地震マグニチュード評価のための研究 (米国地質調査所), アコースティックエミッションによる岩石内のフラクチャー発生過程についての研究 (米国鉱山局), 人工知能法による鉱物資源評価法の研究 (米国地質調査所), JICA プロジェクト: 鉱床探査技術及び鉱物・岩石分析技術 (パキスタン地質調査所), 廃坑鉱脈の地質学的評価 (ホンデュラス鉱山局), 潜頭鉱床探査チーム養成 (モロッコ鉱山探査投資公社), MOU (研究協力に関する覚書): 米国地質調査所, 中国地質産産部, ニュージーランド科学技術研究省